嗚呼、隊長殿

bamse

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嗚呼、隊長殿

【Ｎコード】
Ｎ８３７８Ｄ

【作者名】
ｂａｍｓｅ

【あらすじ】
少女のような風貌の隊長と前線に二人きりで取り残されたボク。
命の危機を感じつつもなんだか心地良い。

（前書き）

願望丸出しの私小説でお恥ずかしい限りです。ご一読頂ければ幸いです。

「こちら帝都北部方面第２機甲兵団第８連隊所属第２小隊です。応答願います。」
我ながらこんな長い名前を良く覚えたもんだと感心しつつ、答えてくれないであろう無線機に呼びかけた。
「・・・・・・。」
やっぱり返答はない。当然だ、四角かった無線機が衝撃でへこみ、正に漢字の凹になっているのだから、使えたらビックリだ。こんな不毛な壊れた無線機との会話を、朝から数十回繰り返している。無論ボクが望んでやっているわけじゃない。続けないと半泣きで怒る上官が後ろにいるからだ。
「ねぇ、通じた？」
見ればわかるでしょ、と言う言葉を飲み込みつつも、振り向く気力もなく首を横に振った。上官殿の影が小刻みに震えているのがわかる。
頼りにならない上官だ、と思いつつ向こうもたよりにならない部下だと思っているのだろうなんて頭の中で悪態をついてみる。いっそ、駄目に決まってるでしょ、と叫びたい気分だ。二人っきりで荒野に取り残され、こっちだって気が滅入っているのに、朝から呼べど叫べど来ぬ救援を、変形した無線機にお願いさせられているのだ。ボクは意を決して文句の一つも言ってやろうと振り向いた。
無理だ。
なんと上官殿は泣いておられた・・・。パッチリとした大きな瞳からは大粒の涙が、白磁を思わせるような白い頬を伝って流れている。後ろにまとめた黒髪が、嗚咽にあわせてさらさらと揺れている。振り向いたボクに気付き、華奢な白い手で口元を押さえつつ、潤んだ

瞳でボクを見つめる上官殿。士官学校出たての２０歳の新米三等陸尉殿、殆ど少女のような面立ちの彼女にボクは何も言えなかった・・・。

ボクは今年の春、軍属になったばかり。ついこの間まで役所勤めの両親の元、なに不自由なく、働きもせず暮らしていた。言ってみれば自宅警備員ってやつだ。しかしいい年こいて仕事もしないボクにとうとう堪忍袋の緒が切れた両親は、軍に入って働くか、今すぐ家を出て行くか、親とは思えない選択を迫ってきた。議論の余地などありはしない、圧倒的に不利な交渉は、あっという間にボクの敗北で終わった。

採用されないだろうとたかをくくっていた入隊検査も、何故かめでたく合格してしまった。入隊してからの３ヶ月は・・・、みなさんのご想像通りの地獄の新兵訓練、っていうかあれは虐待だった。集団生活が嫌いだから一人家の中にいたのに、いきなりの寮生活。プライベートって言葉を忘れそうになった。運動が大嫌いだからいつもＰＣの前に座っていたのに、いきなりの体育会デビュー。無駄に走らされ、登らされ、ｅｔｃ。以前は悲しい気持ちになったときに触るだけで癒してくれた、ボクの柔らかくポッコリしたお腹も、あっという間に削られて、気が付けば１０ｋｇの減量に成功してしまった。

３ヶ月の地獄の訓練生活が終わり、いよいよ配属が決まった。帝都北部方面第２機甲兵団第８連隊所属第２小隊所属三等陸士。これがボクの名称らしい、つまり歩兵だ。ボクの部隊で注目していただきたいのは機甲兵団と言うキーワード。機甲兵とは全高３ｍ弱の騎乗式人型兵装、動力の付いた鎧みたいなもんだ。卵を逆さまにして、手足を付けた様な不恰好な代物だ。走行速度は人が走るのとそう変わらない、機銃も申し訳程度についてはいるが、重量の関係で１０

ｍｍの装甲を貫けるかも怪しいお粗末なもの。技術的には最先端のようだが、戦場に必要な理由が全くわからない。そのくせお値段は戦車５~６台分だっていうから、ますます謎の兵器だ。元々この兵器、前線に送る歩兵の死傷率を下げる為に作られたらしいが、コストがかかり過ぎるから、将校が前線に顔を出す時のみ使用される。さらに単独での行動は難しく、装甲車やホバークラフトが常に同行し、整備兵が必ず必要となる。だったら前線に出さなければ良いと思いがちだが、前線に出るのが常に兵卒のみでは世論が持たない。将校も命を掛けて前線に出ていますとアピールしつつ、実際死なれちゃ困る将校を流れ弾から守るための兵器、それが機甲兵なのだ。つくづくお偉いさんの考えは、庶民には計り知れない。

わからないと言えば、この戦争自体もそうだ。ボクが生まれる前から続いていて、完全に両者の均衡が取れている。軍報では勝った負けたといちいち賑やかだが、何十年も前から両者の領土は地図で見れば１ｃｍも動いていない。惰性でやっているとしか思えない戦争だ。しかし両者共に、いちにのさん、で戦争を止める様な画期的なアイデアも生まれず今日に至っている訳だ。

話をボクの部隊に戻そう。機甲兵小隊は通常整備兵二名が随伴するが、整備兵の助手としてボクが着任することになった。整備兵の助手と言っても、機甲兵の整備訓練を受けたこともないボクは要するに歩哨、あるいは弾除けぐらいにしか思われていないんじゃないだろうか？そしてあの有難い機甲兵に搭乗するのが、我らが隊長、まえちゃんだ。失礼、三等陸尉殿だ。先輩の整備兵達が、まえちゃん、と呼ぶもんだから・・・。そう言えば苗字を忘れてしまった。無論本人の前では、三等陸尉殿あるいは隊長、と呼ぶに決まっていることを念のため申し上げておこう。去年士官学校を卒業し、前線にも数回顔を出している実戦経験者、といいたいところだが、前線には機甲兵で顔を出しただけで、一発の発砲経験も無い。経歴上は典型

的なお飾り将校だ。本人はと言えば、長い睫を伴った大きな瞳に人なつっこそうな垂れた目尻、お餅みたいな白くて丸いほっぺとノーメイクでもうっすらと桃色の柔らかそうな唇は、絵に描いたような童顔で、将校と言うよりは少女そのものである。部下より小さな背丈を気にして底入りのブーツを履いているのも加わってか、すらりと伸びた少年の様な脚。しかし身体だけはしっかり発育しているようで、括れたウェストに反して軍服を押し上げる豊かなバストと、対を成すような上向きのヒップが、私は大人ですよと辛うじて主張しているかのようだ。確かに、三等陸尉殿、と呼ぶには愛らしすぎる風貌の持ち主である。本人も自分の風貌を自覚してか、無理に張り切っている。可愛らしい舌足らずな口調でも、部下たちには威厳を保ちたいという理念がありありと見える。噂によれば、良家の末娘として生まれ何不自由なく育った彼女であったが、何を思ったか士官学校に入学し、そのまま軍属、しかも誰もが気を回してデスクワークを与えようとしたが、それを蹴ってまで前線での勤務を切望したらしい。彼女なり、良家の子女なりのコンプレックスがあったのだろうか？彼女の頑張りは軍の嘲笑の的だったが、ボクにはその頑張りが微笑ましく思えた。

彼女の部隊に配属されてから2ヶ月、ボクにとっても初めての前線行きが決まった。近く展開される侵攻作戦前の戦車大隊の壮行会への出席が任務だった。周囲の部隊からは、お飾り部隊、とからかわれるが、先輩の整備兵に言わせれば、死ぬ確率の低い有難い任務でもあった訳だ。しかし彼女は終始真剣そのもの、輸送機のなかでも壮行会の式次第を読み返しつつ、自分らの配置と万が一にも有り得ない敵の攻撃があった場合の対処等、私物のＰＣ端末と睨めっこをし続けていた。

「総員、整列っ。」

壮行式前日、現場に到着した我々に彼女の可愛らしい声が、凛とし

て響いた。場所は9月の荒野、レッドバレー。猛暑の中額に汗しつつ、部隊指揮をとる彼女はけなげを通り越して滑稽にすら見えた。総員と言っても彼女を含め三人しかいない第2小隊は整列をした。

「おいおい、おもちゃの兵隊が増援に来てくれてるよ。」

後ろから心無い声が響いた。声の方向を見れば、戦車の砲塔から上半身を出して、ひげ面の将校が笑っている。戦車の周囲にいた兵卒たちもにやにやしながらこちらを見ている。我関せず、そう思って隊長の前に直立不動を保っていたが、やっぱり彼女は切れちゃった。

「何がおかしいんですかっ。」

我が隊長ながら、全く迫力のない啖呵だ。しかし彼女は白い肌を耳までピンク色にして怒鳴った。しかし戦車部隊の歴戦の勇士達は全く相手にもしない。大笑いしながらその場を立ち去っていった。下唇を噛み締めながら、去っていく兵たちを見る彼女の瞳は明らかに潤んでいた。先輩の整備兵が、やれやれ、といった表情をボクに見せる中、ボクは彼女を守ってあげたい気持ちで一杯になった。なにが出来るわけじゃないけど・・・。

壮行会は盛大に執り行われた。我々第2小隊は本部近くでその様子を見守っていた。隊長は当然機甲兵に搭乗し、先輩整備兵も装甲車内に待機していた。ボクだけ猛暑の中、外に立っている。機甲兵の横で小銃をぶら下げているのがボクの任務のようだ。せめて軍服の第一ボタンを外したい所だが、まえちゃん、もとい隊長からきちんとしてくれと厳命されている。

「暑い中一人だけ外でごめんなさいね。」

壮行会前のこのひと言が無かったら、とっくに上着を脱ぎ捨てている。思えばこの小隊を部隊として繋ぎ止めているのは、たまに垣間見せる彼女のやさしい姿なのかも知れない。外から見えない機甲兵の中でも一人、口を真一文字に閉じているであろう姿を想像してボクは暑さに耐えた。

壮行会何人目の挨拶だろう、間延びしたお偉いさんの挨拶は突然の炸裂音で途切れた。戦車大隊のちょうどど真ん中に砂煙と火炎が舞い上がる。敵の攻撃は迅速だった。次から次へと榴弾が戦車大隊の中に打ち込まれ始めた。いわゆる鶴翼の陣を敷いていた戦車大隊は、蜂の巣をつついた様な大騒ぎになる。

「・・・大変。」

レシーバーを通じて隊長の声が届いた。榴弾は徐々に戦車大隊の右方向に集中し始め、部隊の右翼は泡を食って回避運動に出た。しかしその方向は本隊と逆方向。あれよあれよと言ううちに戦車大隊は分散し、右翼の一隊は孤立し始めていた。つらい訓練期間中、座学で学んだ榴弾の恐ろしさをボクは思い出していた。ミサイルや機銃ならその軌跡を辿れば比較的簡単に敵に行き着くが、弧を描いて落下してくる榴弾はその発射先を特定するのが非常に難しい。しかも本来風向きや天候で左右されて、狙いを定めるのが難しい榴弾が、的確に戦車大隊を混乱に陥れている。榴弾の発射先を探すのには航空機による上空からの索敵がもっとも有効だが、これは戦車大隊の壮行式で戦車以外にはボク達を乗せてきた輸送機が数機あるのみ。おっとり刀で離陸しても、迎撃される可能性が高い。

ふと周りを見渡すと、ボク達同様壮行会に参加だけしに来た、他の機甲兵小隊も退散し、本部付近はボク等だけになっていた。

「隊長、我々も下がりましょう。」

装甲車から整備兵が叫んだ。珍しく緊迫した声だ。確かにこのままここにいたのでは危険だ、心から賛成しつつ装甲車に乗り込もうとしたその時だ。ブースターの噴出音とともに、その爆風がボクの身体を地面に叩き付けた。いったい何が起きたんだ？と上を見て僕は文字通り仰天した。隊長の機甲兵が上空数十メートルまで飛び上がっているではないか。脚の遅い機甲兵には、敵から逃れるためのブースターが付いている。もちろん脱出用なので、そう何回も使えない。

「隊長、なにやってんですか！！」
装甲車から整備兵の罵声にも似た叫びが聞こえた。確かに先輩の言うとおりだ、彼女の行動は常軌を逸したものにしか見えない。
「・・・・あそこっ。」
隊長の歓声がレシーバーから漏れた。ゆっくり落下してくる機甲兵を見てボクはやっと理解した。隊長は榴弾の射出地点を見つける為に、飛び上がったのだ。戦車部隊はボク達から見て下方、つまりボク達は小高い丘の上に本部を置いていた。戦車部隊からは見えないが、本部から飛び上がれば確かに見晴らしは良い。どうやら彼女は敵の位置を確認したようだ。
振動と共に彼女を載せた機甲兵は着地した。
「早く戦車部隊に知らせて、敵の位置は・・・。」
敵を発見できたうれしさの余り、意気揚々とした彼女の声を整備兵が遮った。
「この混乱の中で、どうやって伝えるんです。無線なんかパンク状態ですよ！！」
「・・・。」
彼女は黙ってしまった。確かに整備兵が正しい。無線が混乱している今、戦車部隊にそれを伝える術はない。ボク達も撤退した方が良さそうだ。ところが、
「みんなはここで待機していて、私が直接場所を示すから！！」
そう言って機甲兵を大混乱の中に向かって走らせ始めた。顔は見えないが、彼女の顔は昨日同様ピンク色に上気しているに違いない。反対に青ざめるボクや先輩たちを他所に。
「どうしますっ！！」
ボクは慌てて装甲車に指示を仰いだ。
「どうしますって・・・。」
さすがに先輩たちも絶句している。そりゃそうだ、隊長だけ行かせて万が一のことがあったら、軍法会議ものだ。
「ったく・・・しょうがねぇ、オマエ着いて行け。」

レシーバーからあまりに無責任な声が響いた。オマエって、ボクのことですか？
「装甲車じゃ丘を下るのに回り道しないと無理だ。」
だからってどうやって？いくら機甲兵の脚が遅いとはいえ、ボクよりは速い。走ってついていけるわけが無い。すると装甲車から出て来た先輩がボクに四角い無線機を背負わせながら指差した。
「そこに転がってる単車で付いてけっ！！見逃がすんじゃねぇぞ。」
指差した先には、我先にと逃げ出した部隊の残した軍用バイクが残されていた。勘弁してください、そう言いたかった。しかしあの隊長の振り絞った勇気が感染したのか、軍法会議が恐ろしかったのかボクにもわからない。無線機を背負いながら軍用バイクに飛び乗った。ボクは単気筒のけたたましいエンジン音とともに、先輩を残して隊長を追った。

丘を下りきった平地は正にパニックそのものだった。戦車大隊は完全に混乱し、互いに衝突を繰り返している。こんなところにいたら、榴弾に当たる前に戦車に轢き殺されるのがオチだ。それでも前へ前へと機甲兵を走らせる隊長、ボクはようやく横に並んだ。
「戻りなさい、単車じゃ危険よっ！！」
隊長がボクに気付いた。機甲兵だって十分に危険だ、榴弾はおろか戦車に体当たりされたら無事じゃ済まない。ボクは隊長に轢かれないように、戦車に当たらないようにバイクを走らせるので精一杯、とてもお答えできません。
「危ないからっ、死んじゃうんだからっ！！」
絶叫のような声にようやくひと言返してみた。
「だったら戻ってください。」
そう言われて戻る人なら、初めからこんな危険な真似はするまい。
諦めながらも必死で機甲兵の傍を走った。
幸運にも混乱する戦車部隊に轢かれることもなく、榴弾の直撃を受

けることもなく孤立した右翼の一隊に辿りついた。戦車達はどこから降ってくるとも判らぬ榴弾に右往左往を繰り返していた。
「みんな落ち着いてっ、前方の谷底に敵の砲撃部隊がいます！！」
隊長が皆に呼びかけるが、混乱は全く収まらない。
目の前にいた戦車が一台動きを止めて、砲塔から将校が顔を出した。
昨日のひげ面の将校だった。
「前の谷底じゃ判らん、このパニックの中どうやって皆を誘導する気だっ。」
戦車部隊の大騒音の中、レシーバーが要らないんじゃないかと思えるほどの大声でひげ面の将校は怒鳴った。
「・・・。」
一瞬の静寂の後彼女は叫んだ。
「私を目印に着いて来てくれればそれでいいですっ！！」
絶叫に近い声が響いた後、彼女の機甲兵は前方の谷へと向かった。
「単機じゃ危険です、戦車部隊と陣形を組みなおした方が・・・。」
ボクの進言はあっさり却下された。
「無理よっ。陣形組みなおせるなら、とっくにやってるわ。それに・・・。」
「それになんです？」
「榴弾は発射地点に近づけば近づくほど狙いが甘くなる・・・はずよっ。」
彼女の言うことは確かに正しい、ただ一つお供するボクから言わせて貰えれば、もう少し自信有り気に言って欲しいものだ。不安を全く消せないボクは、先陣を先駆ける隊長に遅れないように、バイクのスロットルを噴かすので精一杯だった。

ようやくボクと隊長は谷の崖っぷちに辿りついた。下を見ると、大部隊ではないが確かに砲撃部隊がせっせと榴弾を装填している。よくこの程度の部隊でこんな大それたことをやったもんだ。なんて感心していた途端、機銃のシャワーがボク等に向かって注がれた。慌

てて隊長とボクは後ろに下がったが、以外に谷底は浅く少しの後退では避けきれなくなってきた。そしてボク達への射角を完全に押さえたロケットランチャーを構える敵兵を見て、ボクは驚愕した。いわゆる成形炸薬弾だ、機甲兵の装甲などひとたまりもない、っていうか生身のボクは一瞬にしてバラバラだ。絶望の中傍らにいる機甲兵の装甲を透かして、隊長の姿が見えた気がした。彼女も絶望に瞳を閉じているように思えた。

鈍い砲弾の発射音と続けざまに響く炸裂音に、ボクは自分が死んだと思った。思ったよりも痛くないし、目の前は真っ暗のままだ。それでも発射音と炸裂音は止む事無く、後方から続けざまに響いた。え？後方から？

そっと目を開けると後ろからどんどんボクの頭越しに砲弾が飛んでいく。谷底の敵兵たちは跡形も無く、散り散りになっていく。

「よくやった、お嬢ちゃん達。あとは俺らに任せな。」

後ろから来てくれたのは、あのひげ面率いる戦車部隊だった。戦況は完全に一変した。我々の勝利だ。

「・・・やったぁ、・・・やったぁ。」

放心状態と思われた隊長の、間の抜けたような声が聞こえてきた。彼女もやはり死を意識していたのだろう。粗い息遣いの割りに、その声は安堵に満ちていた。

「隊長、無茶は・・・。」

ここまでにして下さいね、と言おうとしたとき、ボクの立っている地面から爆発音が聞こえた。あれ？と思ったときにはボクと隊長の機甲兵が立っていたはずの地面が、そっくり無くなっている。残存する敵兵が、断末魔の攻撃を仕掛けてきたのだった。このままでは十数メートル下の地面に叩きつけられる、浮き上がるような感覚で落下しはじめたボクは、隊長の機甲兵にしがみついた。隊長の機甲兵も落ち始めていたが、なんのブースターで飛べるはず。隊長もそう思っただろうしボクもそう思ったから機甲兵に飛びついたのだが・

・・。ブースターからは弱弱しい、ガス漏れ程度の噴射剤が洩れるのみ。一度目のジャンプで殆ど噴射剤を使い切っていたらしい。落下スピードは弱まるものの、じわじわと谷底へ向かっていくボク達第2小隊、残二名。機甲兵にしがみつきながら恐る恐る下を見ると、有難いことに敵兵はもういないようだ。しかしながら事態は悪い方向へと進んでいるようだ。噴射剤の少ない機甲兵は、そのコントロールが効かないようで、谷底の川へと向かっていく。昨日一昨日の大雨で、川は濁流と化していた。

「隊長、やばいです。隊長。」

叫んでも帰ってくるのは彼女の悲鳴のみ。このやり取りを数回繰り返した後、ボク達は濁流に見事着水した。

濁流の中、コクピットを上にして何とか浮かぶ機甲兵の上でボクは絶望していた。濁流に飲み込まれそうになるわが身と、徐々に沈みつつある機甲兵を見てボクはもう駄目だと覚悟した。こんなに頑張ったのに・・・。世の中の無常と無理やり軍に押し込んだ両親への恨み事でも呟こうとしたその時、レシーバー越しに震える声が聞こえた。

「機甲兵は沈んじゃうから、早く離れて。」

明らかに震える声で、最後まで部下を気遣う彼女にボクは感動した。こんな目にあってるのは彼女のせいだという事実は置いといて。ボクは機甲兵のハッチを外から強制開放した。パイロットスーツに身を包んだ彼女は、ヘルメット越しにも愛らしかった。守ってあげたい、昨日の誓いがボクの頭を沸騰させた。自分でも驚くほどの力で、彼女を沈み行くコクピットから引きずり出した。

「貴方だけでも逃げて・・・。」

どんどん沈む機甲兵の上で、彼女は感動的な言葉を吐いた。でも、この状況でボクだけどうやって逃げるんですか？空を飛べるわけでもないし、こんな濁流の中で泳ぐことはおろか浮かぶこともできないし・・・。待てよ？浮かぶ？

「失礼します。」
ボクは機甲兵搭乗用のパイロットスーツの機能を思い出した。搭乗員を守るため、強い衝撃を与えるとパイロットスーツの胸部と背部がガスで膨らみバルーンを作る。例えて言えば体側についているエアバックみたいなもんだ。放心状態の彼女のパイロットスーツの胸部、背部の装甲板を剥がし、バルーンを開かせた。あとはバルーンのガス放出弁を抑えればバルーンは浮き袋になってくれる。我ながら良く思いついた、と感心した矢先ボク達は濁流に飲み込まれた。ボクは隊長にしがみつきながら、ガス放出弁を抑えるので必死だった・・・。

目を開くと朝日が見えた。あれ？濁流に呑まれてその後・・・。ボク等は運よく下流の泥の溜まった岸に流れ着いていた。ボクの右手はしっかりと隊長の身体を抱き抱えたままだった。
「た、た、助かった。」
ボクは震えながら身体を起こし、この幸運に感謝した。そして右側には隊長も無事横たわっている。泥に埋まりかけた身体を引きずって、まともな地面に下ろしても、死んだように眠っている。え？死んだように？
自分の考えにぎょっとした。慌てて呼吸を確認しようにも、分厚いパイロットスーツに阻まれて、胸が動いているかも判らない。完全防備のパイロットスーツはボクに隊長の脈さえ取らせる隙間も無い。救命処置のイロハ位は訓練中にならったが、どうすりゃいいんだ。まず、ヘルメットを脱がしてみる。ヘルメットをしていたわけだから、水を飲んでるはずはない。彼女の白く愛らしい顔は、血の気を失って透き通るかのようだ。素人目にも危ないような気がする。救命処置訓練で習った通り、顔に自分の頬を近づけていく。なんとも言えない甘い香りが、ボクの鼻腔をくすぐった。なんだかドキドキしてきた、眠り姫を起こす王子様にでもなった気分で、ボクはさらに顔を近づけた。

バチン

彼女は確かに生きていた。っていうか思い切りビンタされた。

「何してるのっ！！」

こんなタイミング良く気が付かなくてもいいのに・・・。そりゃ多少は邪心も混ざったけど、真剣に心配してたんですよ。

訳も判らずビンタされたとは言え、この人は上官殿だ、懇切丁寧に今までの経過を話した。無論ドキドキの話は割愛したけど。

小一時間ほどで彼女は落ち着きを取り戻し、ボクへの誤解？も解いてくれた。ずぶ濡れのパイロットスーツに身を包んだままの彼女は、未だ生存の奇跡に酔って幸せの中にいた。両手を胸の前で組んで、なにかお祈りしてみたり、頬をピンク色にしてあれこれ考えているようだ。幸せいっぱいの彼女を見ているうちに、なんだか心配になってきた。ボク等は一体どこにいるんだろう？

幸せに浸っているところ大変申し訳ないが、僕は彼女に自分の不安を告げてみた。

彼女は未だ楽天的だった。ボクの背中の無線機を当てにしていたようだ。九死に一生を得るような濁流の中、ボク達が生き残ったのこそ奇跡で、無線機がその奇跡にあやかっているとはとても思えない。気が乗らないボクに、上気した顔で彼女は言った。

「さ、はやく連絡取りましょ。」

メールならハートマークが付きそうな浮かれた声だった。

無情にも凹んだ無線機は、当然使えなかった。それでも彼女はボクに壊れた無線機との不毛な会話を強要し続けた。ボクに無線をせがんでは、その結果に泣き崩れる。先ほど先陣を駆けて敵本陣へ突入した同一人物とはとても思えなかった。いつの間にか太陽が昇り、

ボク等の影が短くなった頃、彼女は泣き疲れて無線機を諦めてくれた。赤い荒野のなか、灼熱の太陽がボク達を焼き始めた。
「・・・暑いね。」
彼女は呟いた。ボクはすでに軍服の上着を脱ぎ捨てて、上半身はタンクトップ一枚のみだ。それでも暑いけど。彼女は未だに分厚いパイロットスーツに身を包んだままだ。そりゃ暑いに決まってる。
「あのー、パイロットスーツ脱いだらどうですか？」
おそるおそるボクは提案してみた。

バチン

先ほどと同じ、乾いた炸裂音がボクの頬に響いた。彼女のビンタ自体それほど力は無いが、パイロットスーツはとても固い。要するに痛い。なんでビンタされなきゃならんのだ？
彼女はまたしても頬を赤らめながら、下を向いてしまった。
「えっち。」
ぼそっと呟くように彼女が言った。彼女は明らかにパイロットスーツを脱ぐのを恥じらっている。まさか裸の上にパイロットスーツを着ているわけじゃあるまいに、さっきまでの勇ましかった隊長はすっかり乙女に戻ってしまったようだ。
しばらくの沈黙のなか、暑さに負けた彼女は消え入りそうな声で再び呟いた。
「上着貸してくれる？」

隊長からボクに厳格な命令が下った。
1．パイロットスーツを脱ぐ間、絶対に振り向かないこと。
2．ボクの上着を羽織ったあと、必要以上に見つめないこと。
3．常にボクが前を歩くこと。
以上３つの命令をボクが承諾すれば、彼女はパイロットスーツを脱ぐと約束してくれた。まるでかくれんぼの鬼のようにボクは彼女に

背を向けてしゃがんだ。もーいーかい？ってやったほうがいいのかな？女性の脱衣音とはとても思えないほど、ガサガサとした色気の無い音をたてながら、彼女は固く分厚いパイロットスーツを脱ぎ始めた。密閉されたパイロットスーツを脱ぎ捨てた彼女は、

「あーっ。」

と開放感に溢れる声を上げた。それと同時に密閉されていた彼女の甘い香りが、ボクのほうへ漂ってきた。元々可愛らしい上官ではあったが、すっかり乙女に戻ってしまっている。ボクは理性と本能の狭間でしばし苦しまねばならなかった。

「もーいーよ。」

パイロットスーツを脱いで開放感に包まれた彼女は、先ほどまでの泣きべそが嘘のように明るい声で着替えの終了を告げた。思わず振り向いたボクは、またビンタか、と覚悟していたが、彼女は慌ててボクの上着に上半身を包んだだけだった。

なんて可愛いんだろう。失礼ながらそう思わざるを得なかった。一本結いに後ろで束ねていた髪はその戒めを解かれて、彼女の動きに合わせさらさらと踊った。窮屈なパイロットスーツに閉じ込められていた瑞々しい身体はその拘束を解かれ、文字通り弾けんばかりに眩しく見えた。ボクの上着を羽織った上半身からは、水色のタンクトップがのぞき、その胸元はタンクトップの文字が変形するほど盛り上がったバストが伺えた。上着の下からは黒いスパッツがちらりとのぞき、そこから輝くような白い脚がすらりと伸びている。男の理想を絵に描いたような光景がそこにはあった。

「ちょっとっ、見過ぎだから。」

決して怒ってはいないが、子供をたしなめる様な声で彼女は言った。その可愛らしい物言いにボクはときめきとめまいを覚えた。ここがどこかも判らない戦場の一画で。

「とりあえず、川の上流に向かって歩きましょう。」

いつまでもほのぼのとしてはいられない、ボクは彼女を促した。すると彼女はちょっと考え込んで言った。
「本隊はそっちなの？方角はあってるのかな？」
ボクは唖然とした。川を流されてここに辿りついたのだ、方角がどっちであれ川の上流を目指すしかないだろうに。いつの間にかボクに移っている指揮権を取り戻したいのだろうか？
「さあ、方角は判りませんけど、調べましょうか？」
ボクがそういうと、尊敬に目を輝かせながら彼女は言った。
「コンパスも無いのに方角判るの？すごーい。」
腕時計を使って方角を調べるボクを羨望の眼差しで見つめる彼女、意味の無い行動ではあるがまんざらでもない。
「わかりましたよ、今午後の二時ちょうどだから・・・。」
南はあっちですよ、と言おうとしたボクの言葉を遮る様に彼女が言った。
「え、今午後の二時なの？」
「そうですよ。」
「大変だ。」
彼女は下を向いて考え込むように呟いた。一体どうしたんだろう？
「もうすぐおやつの時間だ。」
舌を出しながら笑う彼女は、遭難したこの状況に全くそぐわないほどお茶目だった。

本隊への帰還に向け希望が沸いたのか、彼女は上機嫌だった。歩き始めのうちはボクの後ろから他愛も無い話をあれこれしていた。彼女がついてこれるか心配で後ろを振り返るたびに、慌てて羽織った上着の前を合わせながらボクをにらむ彼女。いくら上着を羽織っていても中がタンクトップにスパッツ姿じゃ恥ずかしいのはわからんでもないけど、そういう場合じゃないでしょうが。しかし三時間ほども歩くと段々その声にも張りが失われ始めた。そりゃそうだ、この炎天下の強行軍だもの。仕方が無い、一度休憩しますか。

ボクが枯れ木の下の小さな日陰を見つけ、そこに腰をおろすと彼女は息も絶え絶えな声で言った。
「なによ・・・つ、つかれたの？・・・しょうがないなぁ・・・。休憩を・・・許可します。」
脚を引きずるように歩く彼女は崩れ落ちるように日陰にしゃがみ込んだ。はいはい、好きなこと言ってて下さい。疲れ切って頭を垂れた彼女のうなじが目に入った。白かったそのうなじから肩は強烈な日光に焼かれ、赤くなりつつある。見れば柔らかそうな太ももも、痛々しい日焼けにその大半を占められている。可愛そうに、このままじゃ脱水症状をおこしてしまう。ボクは腰のサバイバルキットに手をやった。
「水分を補給しましょう、これを・・・。」
どうぞとボクが言い終わる前に、ボクの水筒は彼女に奪われた。水筒を天に向けて、あごからはちきれそうな胸元へ水が垂れるのも構わず、彼女は水を飲み続けた。胸元にこぼれる水滴がその豊かな谷間へと吸い込まれていく。吸い込まれた先には彼女の・・・。そんな光景に見入っていると、彼女は笑顔でボクに水筒を返した。
「ありがとう、生き返った気分。」
上機嫌な彼女に不意をつかれ、慌てて胸元から目を逸らし、水筒を受け取った。ありゃ？軽いぞ・・・。彼女全部飲んじまった！。呆然とするボクを不思議そうに見つめながら彼女は言った。
「どしたの？飲まないの？」
「・・・空です。」
ボクの答えに驚いた彼女は、慌ててボクから水筒を奪い返した。自分で飲み干しておきながら、水筒を振ってみたり、逆さにしてみたり、しかし空の水筒に水が湧き出るはずもなく、ボクの分はやっぱり無かった。
「実は水筒、もう一つくらいあったりしないの？」
彼女は不安げにボクを見ながら言った。ボクは軽い絶望を感じつつ、無言で首を横に振った。途端に・・・。

「ごめっ、ごめんなさい・・・。」
言葉にならない嗚咽を洩らしながら、また彼女は大泣きし始めた。身を震わせ、両手で顔を隠しながら泣きじゃくる彼女。彼女の肘が両脇から豊かなバストを寄せ上げ、あの美しい谷間がこれでもかとばかりに盛り上がり、その谷間を強調する。ボクは悲嘆と贖罪の気持ちで一杯の彼女を他所に、その谷間にただただ圧倒されていた。徐々に傾きつつある日差しの中、ボクは水なんかどうでも良くなってきた。

「本当にごめんなさい、飴玉だけで大丈夫？」
灼熱の太陽がその身を地平線に沈めた頃、彼女はようやく落ち着きを取り戻し、飴玉で渇きを癒すボクを心配そうに見つめた。幸運にも飴玉は二つあったので、今回はボクも食いっぱぐれはなかった。
「大丈夫ですよ、心配いりません。それより少し冷えてきましたね。」
すっかり暗くなったあたりを見渡しつつ、ボクは落胆する彼女に声を掛けた。先ほどまで体の水分をすべて搾り取るかのような熱気に見舞われていた荒野に、いつの間にか肌寒い冷気が漂い始めた。見渡すかぎりの岩肌は、晴天の星空にその熱を奪われ、荒野や砂漠に特有の凍える夜を身をもって体験する破目になりそうだ。
ボクは昼間灼熱の日差しの中、小さな日陰を提供してくれた枯れ木の枝を薪代わりに折り始めた。
「何をするとこなの？」
命令口調を完全に失った彼女は丸い目をさらに丸くしてボクの行動を見守っていた。見れば寒そうに、ボクの上着にくるまっている。どうやら彼女にはサバイバルの素養が全く備わっていないらしい。ボクはズボンのポケットからオイルライターを取り出して、彼女に見せた。
「そっかぁ、寒いから焚き火するんだね。なんかキャンプみたいな気分。」

彼女には危機感も備わっていないようだった。

パチッ、パチパチ

枯れ木が炎の中で爆ぜる音が荒野に響いた。焚き火でようやく暖をとっている我々を、夜の帳が包む。見上げれば、今にも落ちてきそうな満天の星空の下、こんな愛らしい彼女と向かい合っている。考えてみれば、一生に一度あるかないかのシチュエーションではある。夜の帳が隊長の、いやまえちゃんの、ほほの白さを際立たせている。両手で抱えた膝から伸びるすらっとしたふくらはぎに触れてみたい衝動に駆られる。なにより彼女の最大の魅力とも言うべき、ふくよかなバストは、クリスマスのターキーみたいに焚き火の明かりを照り返している。炎を見つめる振りをしながら、彼女に魅入っていた。

「もしかして、怒ってる？」

まえちゃんの不安げな声に、夜の静寂とボクの妄想は一気に掻き消された。

「えっ、いやいや、とんでもないです。」

まさか、隊長殿に見とれていたとは言えず、ボクは慌てた。

「ごめんね、あたしのせいで、こんな目に遭わせちゃって・・・。」

まずい雰囲気だ。このままだとまた彼女は泣くに違いない。ボクは必死で弁明した。

「なにいってるんですか、隊長のおかげで、戦車大隊は全滅を逃れたんですよ。英雄ですよ。」

「・・・」

「勇敢です。立派です。我が隊長として誇りに思いますよ。」

我ながらちとオーバーだったかな？彼女を見やると、伏目がちにじっと炎を見つめている。彼女がゆっくり話し始めた。

「あたし・・・怖かったの。」

「そりゃそうですよ、いきなり敵陣に乗り込むなんて。」

「そうじゃなくて、みんなの目がいつも怖かった。」

予想に反した彼女の答えに、思わず言葉を失った。しばしの沈黙のあと、彼女は続けた。
「知ってたの、自分がお飾り将校で、なんの役にも立ってない事。だから背伸びとわかっても、一所懸命隊長って立場に慣れようとしてた・・・。でも頑張れば頑張るほどまわりの部隊からも、小隊のなかでも滑稽に見えるのね。」
「・・・」
「でも、いつかみんなを見返してやろうって、そう思っていた矢先に今日のことがあったから。つい夢中で、気が付いたら敵の本陣に単機で突っ込むような無謀な真似を・・・。」
すみません、単機ではなくボクもいたんですが・・・。
「たまたま上手くいったけど、結果はこのざまだもんね。」
彼女は自嘲的に笑った。そして突然ボクの目を見つめながら、
「でも、本当に嬉しかった。あたしの無茶にあなたがついて来てくれたこと。そしてこんな目に遭わせたあたしを未だに隊長って呼んでくれて。」
焚き火越しにボクを見つめるまえちゃんの潤んだ瞳、小刻みに震える肩、全てが愛おしく見えた。
「ありがとう。」
彼女の言葉を合図にボク達の距離はじわじわと近寄り始めた。そしてまえちゃんの左肩がボクの右肩に触れるやいなやの距離になった瞬間、

アオーン

何者かの遠吠えに、ボク達は思わず身構えた。なんだろう、犬の遠吠えにも聞こえるけど、こんなところに犬なんて・・・。
「見て、犬がいる。」
犬なわけないでしょうが。せっかくのムードとぶち壊した侵入者をボクは睨み付けた。しかし睨むにはボクの二つしかない目では足り

ないようだ。コヨーテだかハイエナだかわからない、イヌ科の捕食者たちは十頭を越える群れで現れたのだった。
「さ、寒いから焚き火にあたりにきた・・・わけないよね。」
震えながらも緊迫感の無い声が、まえちゃんの口から洩れた。

グルゥゥゥ

群れは焚き火を中心にボク等を囲みながら、あたりを旋回しはじめた。ボクは焚き火の燃えさしを右手に腰を落として身構えていた。そしてボクの背中にしがみつく様に、まえちゃんが震えていた。彼女は焚き火を背にしており、とりあえず後ろから飛びかかられる心配は無さそうだ。
「あげる食べ物なんかないんだから・・・、帰りなさいよ。」
震える声で、まえちゃんが叫んだ。食べ物って、多分ボク等だと思うんですけど。ボクのもっている焚き火の燃えさしは細く、武器としては非常に心もとない。燃えさしの先で揺れる炎が、かろうじて敵の攻撃を阻んでいるようだ。しかしこの膠着状態も長くは続くまい。ボクの正面で、大きな一頭が唸りをあげた。どうやら群れのボスらしい。その時なにを思ったか、ボクの後ろで震えていたまえちゃんがボクの右前に出てしゃがみこんだ。どうやら石つぶてをひろおうとしたようだが、群れのボスはボク等の陣形が崩れたのを見逃さなかった。獰猛な叫びと共に、まえちゃんに飛びかかろうとした。ボクは恐怖と絶望に思わず目をつぶった。

パチン

何かが爆ぜる音のあと、もの凄い獣の悲鳴があたりにこだました。恐る恐る目を開けると群れのボスが顔を抑えながらボクの目の前でもがいている。どうやら焚き火の枝が爆ぜて、飛びかかろうとしたボスの顔に燃えた枝が直撃したらしい。恐ろしい襲撃者のボスは、

いまやボクの目の前で悶える弱弱しい存在となった。もともと強者には弱いが、弱者には強いボクだ。このチャンスを逃さず、思い切りボスの顎あたりを蹴り飛ばした。

ギャイン

予想もしなかった反撃にボスはひっくり返り、そのまま脱兎の如く逃げ出した。我先に逃げるボスを追って、群れはそのまま姿を消した。た、助かった・・・。緊張の糸が切れて、というより腰が抜けて、ボクは握っていた燃えさしを手放し地面に両膝を付いた。

ガバッ

その瞬間、右から何かがボクに飛び掛ってきた。悲鳴をあげる間も無く、ボクは地面に押し倒された。助かったと思ったのに、今度こそもう駄目だ・・・。首を折らんばかりに締め上げてくる両腕、ボクの胸を潰さんばかりに押し付けられる何らかの二つの弾力、ボクは絶望に目を閉じた。遠のいていく意識の中、あまり良い事のなかった人生が、走馬灯の様に浮かび上がってくる。ああ、軍隊なんか入るんじゃなかった。薄れゆく意識の中、ボクの体を包む甘い香りが黄泉へ誘う・・・。え、甘い香り？

「怖かったよー。」

飛びついてきたのはまえちゃんだった。身体を震わせながら、玉のようなバストをぐいぐいとボクの胸に押し付けてくる。そして涙でクシャクシャの顔で、心配そうにボクの顔を覗き込んだ。

「大丈夫？」

なんてシチュエーションだ。満天の星空の下、こんな美少女と二人きり、しかも彼女の方からボクに抱きついてくるなんて・・・。しかし、幸福な時間は長く続かなかった。一度付いた勢いは収まらず、ボクの意識はどんどん遠くなっていく。おい、こんなチャンス二度

となないんだぞ、気を失っている場合か。自分に言い聞かせても、もはやこれまで。
「ちょっと、大丈夫、ねえ、ねえってば。」
彼女の悲鳴にも似た声に彼女の優しさを感じながら、ボクは例えようの無い無念を抱きつつ深い闇の中へ落ちて行った・・・。

照りつける太陽が、ボクの額を焼き始めた頃、ボクはようやく目を覚ました。横になったまま腕を伸ばそうとしたが、右肩が重くて上手くいかない。右側を見ると、まえちゃんがボクの肩に頭を押し付けるようにして寝息を立てていた。僕は人生初の腕枕に感激しつつ、風に揺らぐ彼女の前髪を恐る恐る撫でてみた。眠りのなか、くすぐったいのか口元を緩めて微笑む彼女。そのほほに愛らしいえくぼが生まれたとき、ボクの我慢は限界に達した。チャーンス。何かが頭の中でボクをけしかけた。彼女のほんのりピンク色の唇に、吸い寄せられるように顔を近づけていく。あと２０ｃｍ、１０ｃｍ、５ｃｍ、カウントダウンが進んでいた。
「心配しないで、あたしが連れて帰ってあげる。」
突然彼女が発した声に、カウントダウンは打ち切られ、びっくりして顔を離してしまった。すると彼女はボクにもぐりこむかのように、ボクの胸に顔を埋めてしまった。なんだ、寝言か。がっかりした反面、その寝姿の可愛らしさに、ボクは硬直したまま彼女が起きるまで寝たふりをし続けた。

ようやく目を覚ました彼女は上機嫌だった。ボクが失神したとき、もしかしたら死んでしまったのかと思ったらしい。
「でも、無事で本当に良かった。夜通し見守っていた甲斐があったなぁ。」
彼女の中では、寝ずの看病をしたことになっていたようだ。可愛いからそういうことにしておくか。いつの間にかすっかりボクに気を許した彼女は、楽しそうに話し続けた。無論、本隊に向けて歩きな

がら。川に沿って歩くうちに、どんどん川はその勢いを増し、いつの間にか濁流となっていた。濁流の勢いが強くなるにつれ、川の両脇は凹型にえぐれ、ついには切り立った崖になっていた。いよいよ本隊への帰還も近いかな。右手に崖を見ながらボクは安堵した。ちょっと待てよ、右手に崖？
ボク等は昨日崖に向かって突進した、そして濁流はボク等から見て右から左へ流れていた。そしてその濁流が、今右手にあるということは・・・。大変だ、本隊は崖の向こう側だ、ボク等は崖の反対側を歩いてきたことになる。思わず足を止めて崖を覗き込んでみる。それなりの高さはあるけど、何とか降りられそうだ。問題は濁流をどうやって渡るかだな。どうしたものかと悩んでいると、彼女が明るく話しかけてきた。
「もしかして、トイレ行きたいの？」
彼女と一緒なら、一生不安を感じずに生きていけるかも知れない。ため息とともにボクは崖の向こうに行かなくてはいけない事情を説明し始めた。

「気をつけて、ゆっくり行こうね。」
ボクが先に降り始め、続いて彼女もボクについてきた。崖に張り付くようにして、ボク等は谷底へと向かった。
「いい、下を見ちゃ駄目だよ。目の前の岩に集中して、手と足を運ぶの。」
珍しく参考になりそうな意見が、ボクの頭の上から聞こえてきた。ロッククライミングの経験でもあるのかな？感心しながらボクは上を向いた。途端に、
「上も見ちゃ駄目っ。えっち。」
彼女の怒声が飛んだ。ボクの頭上には、スパッツに包まれた彼女のまあるいお尻がある訳で・・・。自分は下を見てるじゃないですか。彼女に慣れ始めていたボクはさほど気にせず、上も下も見られない状況の中、ボクはつまらない岩肌だけを見つめその起伏に手がかり、

足がかりを探しながらゆっくりと崖を下り始めた。

ようやく谷底に着いた我々の前に、昨日流された川が横たわっていた。雨が降らなかったせいか、川の流れに昨日ほどの勢いは無いが、近づいてみるとそれなりの速さで流れている。ボクが試しに川の中に入ってみると、川の深さはボクの肩位までである。しかも結構流れが速く、気が緩むと流されてしまいそうだ。川の中に点々とある岩に捉まりながら、ゆっくり渡るしかなさそうだ。ボクが川から上がろうとしていたら、なんと岸から見ていた彼女が川に入ろうとしているではないか！彼女の背丈はボクの肩位までしか無い訳で、当然彼女は頭まで水に浸かった。あっという間に下流へ流されそうになる彼女の右手を捕まえられたのは奇跡に近かったと思う。

「・・・無茶・・・しないで下さい。」

必死の思いで流されかけた彼女を川岸へ引き上げた。

「・・・ごめん。」

彼女は素直に謝った。ボクも彼女もずぶ濡れのまま、しばし川岸に腰を下ろした。ずぶ濡れになった彼女の衣服はぴったりと身体に密着し、瑞々しくも豊満なラインを強調していた。うなじを撫でるように、水気を払うその姿はさながらビーチに座ったグラビアアイドル顔負け。彼女から滴り落ちる水滴を吸う、地面が羨ましくさえ思えた。ああ、彼女を下から支える地面になりたい。

彼女の姿を思う存分に堪能したボクはようやく我に返った。これはかなりまずい状況だ。この川、ボク一人なら何とか渡れそうだが、背の低い彼女は絶望的だ。いや、ボク一人でも流される可能性は十分にある。体が浮かないように、何か重りでもないと・・・。重り・・・。

「ねぇ、本当に大丈夫？」

彼女を下から支える地面になりたい。そんなボクの願望は割りと簡単に叶った。彼女一人では当然この川は渡れないし、ボク一人でも体が浮いてしまえば流されてしまう。ボクの提案は彼女を肩車で背負い、渡河を試みることだった。彼女はボクの負担と肩車への気恥ずかしさに難色を示していたが、それ以外に二人で渡りきる方法がないとわかると渋々ながらも承諾してくれた。彼女の柔らかな太腿がボクの首を両側から挟みこみ、弾力のあるヒップにうなじが食い込む。両手でボクの頭を抱え込んでいる彼女だが、バランスが崩れそうになる度に、あわてて前かがみになる。その時ボクの頭を柔らかく擦るのは、紛れもなく彼女のバスト。ボクの胸から下は川の中にあり、上半身だけが甘美な感覚にあやかっている。このときがずっと続けば良いのに。降って沸いた幸運？に感謝しつつ、ボクは彼女を担いで渡河を開始した。

幸せな時間は長く続かない、それが真理だ。渡河の途中、ようやく流れの中の大岩にしがみついたボクは荒い息の中つくづく思った。彼女を肩車して川を渡る、我ながらいいアイデアとおもったが、甘かった。自分の体力を全く計算していなかった。彼女と密着する甘い感覚など、数歩歩いただけで消え去り、一歩歩くごとに足腰が悲鳴を上げた。川の半分弱まで来て、ようやくこの大岩にしがみついた時には、もはや一歩前に進むことも出来ない状況だった。最後の力を振り絞り、彼女を大岩の上に座らせた。ボクは流れの中、流されないように大岩にしがみつくのが精一杯。

「だ、大丈夫？」

岩の上から彼女が心配そうにボクを覗き込む。辛うじて上を見上げると、泣きそうな顔の彼女が、岩から身を乗り出していた。濡れた髪が白い頬に張り付き、潤んだ瞳がボクを見つめる。柔らかそうな桃色の唇から、ボクをねぎらう優しい言葉が洩れる。ボクは力ない笑顔を彼女に向けながら思った。ボクはこの人に惚れている。この優しさに、そして愛らしさに、ついでに場にそぐわない能天気・・・

いやいや無邪気さにも。しかしボクには初めて惚れた愛しの彼女を本隊に連れて帰ることが出来なさそうだ。岩に捉まりながら無力感に打ちひしがれるボク。その無力感がじわじわと生還への意欲を奪っていく。少しずつボクの腕から力が抜け始めた。無責任にも無計画な渡河を提案し、結果彼女を流れの中の大岩に残してしまう。先に流されてしまうであろう我が身よりも、こんな場所に一人取り残される彼女への申し訳なさで一杯だった。いつの間にかボクはぼろぼろと涙をこぼしていた。

「諦めないで。」

彼女の凛とした声が、川の中に響いた。そして岩から身を乗り出し、ボクの両肩をしっかりと掴んだ。しかし彼女の力では到底ボクを引き上げることなど出来はしまい。しかし彼女は意外な行動に出た。バランスを崩したら、彼女も川の中に落ちそうなくらい身を乗り出し、その顔がボクの目の前まで近づいた。驚いて目を瞑ったボクの身体に、経験の無い感覚が訪れた。柔らかくて温かいものが、ボクの唇に触れた。これって、もしかして・・・。ボクの薄れかけた生への執着を呼び戻すためか、ボクへの好意の表れなのかわからない。確かなことは彼女はボクに口づけをしてくれたってことだった。改めて彼女の顔を見つめると彼女も泣いていた。ボク達は抱き合うことも許されない状況の中、互いの不幸を思ってただ泣く事しか出来なかった。

「おいっ。岩の上に誰かいるぞっ。」

向こう岸から声がした。見ればボクと同じ軍服に身を包んだ兵士たちが数人、向こう岸から叫んでいた。救援だ。

「お願い、早く助けて、溺れちゃう。」

彼女が岩の上に立ち上がり、ボクを指差しながら泣き叫んだ。救援部隊の行動は素早かった。ライフジャケットを二つロープに括り付け、僕らに向かって投げてよこした。まえちゃんナイスキャッチ、とはいかず渾身の力を振り絞ってボクが流れの中ロープを捕まえた。

まず自分のライフジャケットを身に纏い、彼女にロープをしっかり掴ませながら川に下ろした。彼女がライフジャケットを着込み、ボクが右腕を上げたのを合図に、ロープが向こう岸に向かって引かれ始めた。ロープにしがみつきながら、水を飲まないように必死で顔をあげるボク達。川岸が近づくにつれ、疲れと安堵からかボクの意識は徐々に薄れていった。

「しっかりして、もう少しなんだから、あとちょっとなんだから。」彼女の優しさを実感しつつ、ボクは川岸直前で気を失った。

気が付いたところは前線から遠く離れた市街の病院だった。ボクは丸一日眠り続けていたようだ。精密検査なるものを受けさせられたものの以上はなく、ボクは一週間の休暇後に原隊へと復帰した。

「第二小隊整列。」

まえちゃんの声、失礼隊長の檄が飛ぶ。原隊復帰を果たして以来、ボクと隊長の親密度が増す、なんて甘い話は無かった。なにしろ彼女は部隊の英雄として、常に人だかりの中心、二人っきりになる機会など皆無だった。今も軍報に掲載する写真撮影の真っ最中。撮影後インタビュアーに色々質問されて、少々照れながらも話す隊長を遠巻きに見つめるボク。隊長の気持ちが知りたい、あのキスはなんだったんだろう？命がけの経験をともにした者達には強い絆が生まれ、男女であった場合には恋が芽生えるって聞いたことがある。しかしもはやそれを確かめる術はない。今後も彼女の無茶に付き合って、二人でもう一度遭難するしかなさそうだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8378d/

嗚呼、隊長殿

2011年10月4日16時52分発行